

溪流釣りなどでよく見
るアマゴやイワナといっ

た淡水魚はキリギリス、
カマドウマなどの陸上昆
虫をよく食べている。な
ぜ地上にいる昆虫が川の
中で暮らす魚に

食われるのか。

それは昆虫に

寄生するハリガ

ネムシ(類線形

虫類)が宿主で

ある昆虫の頭脳

を操作して川に飛び込ま

せているからである。そ

して昆虫と一緒に魚に食

われることで寄生虫も世

交代が可能となる。イ

ワナの場合、そのような

昆虫が年間の餌の6割を
占める。

以上のような論文を京
都大学の佐藤拓哉特定助
教のグループがアメリカ
の雑誌「エコロジー」に

時々 草々

今月発表した。寄生虫が

昆虫に川に飛び込むよう

命令しているというのは

驚きだが、実はこのよう

なことは他の寄生虫でも

よくみられる。

越智 敏夫 (新潟国際情報大学)
教授 (新潟国際情報文化学部)



この論文の紹介記事を
読んでいて一番驚いたの
は別の点である。それは
淡水魚の餌に関して、こ
れまでの学界の「通説」

るまいし、キリギリスや
カマドウマのようなすば
しい昆虫が簡単に木
から川に落ちるわけがな
い。ましてや川魚が安定

か。素人でも不思議に思
う。
ところが、おそらくは
どこかの専門家が一度そ
う言いはじめたら、その

て東京電力と政府が言い
訳として繰り返している
「通説」や「科学的想定」
も、大震災以前にはおそ
らくそれなりの説得力を
もっていたのか

「通説」疑うことと必要

では「風雨などの偶発事
によって川に落下した昆
虫とされていたという
ことだ。とろい猿でもあ

して摂取できるほど大量
の昆虫が落下するだろう
おち・としお 196
1年愛媛県生まれ。立教
大学法学部卒。慶応大学
大学院政治学博士課程修
了。96年、新潟国際情報
大学講師。2006年に
教授。専門は現代政治学
理論。

「通説」の表面上の説得
力に他の研究者も目を曇
らされて、現実に風雨で
落ちる昆虫の量を調べよ
うとも思わなくなったの
だろう。科学の世界でさ
え生じる「通説」の怖さ
である。

しかしこの文章は東京
電力と政府だけを批判し
ようと書いたのではな
い。政治学を専門とする
自分もどれほど「通説」
を疑ってきたのか。自省
する思いで書いた次第で
ある。

東日本震災以降、福
島第1原発の事故に関し

ある。

ある。